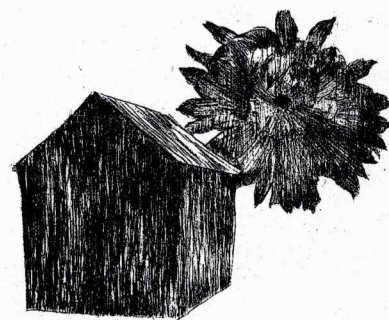


朝日歌壇



〈ガーベラと家〉 岩尾恵都子

・佐佐木幸綱選

吹き付ける雪がたちまち隠しゆく灯油を入れ
るタンクの赤さ (南魚沼市) 木村 圭
終活の手始めとして茶華道の許状を捨てる燃
えるゴミの日 (橋本市) 秋月 晶江
ハガキだけで受けつけているリクエスト古
流儀の山下達郎 (東京都) 清水真里子
☆カラビナに擦れてザイルが立てる音岩壁を蹴
るたび転調す (京都市) 中川 大
食いつきのゴーンは異国でほくそ笑み見る影
も無き(日産) 哀れ (近江八幡市) 寺下 吉則
おべっかに飽きたトランプ無愛想な石破がと
ても新鮮だった (西海市) 前田 一揆
森友の首相答弁書きさす読み上げられし用意
の手紙 (横浜市) 一石 浩司
今もまだ被災地支援の情報が四分の一占む能
登版紙面 (羽咋市) 北野みや子
年度末で職を失う元気で仕事が出来ても歳
の壁あり (横浜市) 桑田よし子
呼吸するように嘔吐く彼なれど文芸部には向
いていたら (オランダ) 宮沢 洋子

【評】第一首、はげしく降り続ける雪。赤と白との対比が印象的。第二首、終活に対する本気度が伝わって来る。第三首、歌手・山下達郎はラジオ番組のリクエストを葉書でしか受け付けられないという。それでも多くの数があるらしい。

・高野公彦選

幾たびも首相変われど拉致の子ら帰られぬま
ま(母は近く (神戸市) 塩谷 涼子
母よ母よ叱つてくれぬ裁縫用いて歌壇切
り抜く我を (観音寺市) 篠原 俊則
そのうちに地球をアメリカ星と呼べと言いつ
しそなたの大統領 (三重県) 藤井 恵子
平和さえ取引に使う大団に媚びる卑屈な小国
もあり (朝霞市) 岩部 博道
雪の朝子らのメールはそれぞれに転倒、骨折
敵に戒む (新潟市) 工藤 紀子
雪だるまと難しいねって語り合う「無理なな
い範囲」という言葉 (富山市) 松田 梨子
放出とふ言葉馴染まぬ百姓われ放り出さる
米を愛しむ (山形県) 南岡 二郎
内容は分かったとさぞと意遣い伝わらなくて
Iの声 (さいたま市) 堀内 雅子
むささびの如く軽々とK点を越ゆるジャンパ
ー(高西紀明 (札幌市) 伊藤 哲
☆朝バスでとなりのクラスの男子からチョコ味
のいちご大福もらう (奈良市) 山添 葵

【評】1首目、北朝鮮による拉致事件はこんな悲劇を生んだ。2首目、裁縫用の裁ち針を大切にしたい母を恋する歌。3首目、メキシコ湾をアメリカ湾と呼べ、と言った如く、そのうち地球をアメリカ星と呼べ、と言いつくすかも、と恐れる。

・永田和宏選

臨終につき添ひくれし看護師が朝の廊下の奥
に消えたり (ひたちなか市) 篠原 克彦
☆昔から微かだけれど好きな音雪が静かに着地
する音 (富山市) 松田 わこ
遠き日の夜のほとりの静けさや櫓木の裏火か
くまで美し (前橋市) 立見 莞爾
☆カラビナに擦れてザイルが立てる音岩壁を蹴
るたび転調す (京都市) 中川 大
実験でけふも徹夜と苦笑する院生の「も」が
跳ねるキャンパス (西条市) 村上 敏之
自撮棒かざして騒ぐ外つ国の人を掻き分け見
る鹿苑寺 (東京都) 影山 博
トランプが署名するたび世界中がほらほらに
なりさうな気がする (岩国市) 木村 桂子
廃屋の底に長短不揃いの氷柱下がりて春また
遠し (舞鶴市) 吉富 憲治
西の道とれば近づく丹沢の肌雪の厚み見え
来る (多摩市) 豊間根則道
わたしが膝に猫を抱いてるときだけは夫は自
分でお茶を淹れてる (札幌市) 西原 由佳

【評】篠原さん、夜を徹してのみとりだったのだろう。亡くなったあと、静かに廊下の奥に消えた看護師への感謝。松田さん、雪の着地の音という思いがけない音が聞こえてきそう。立見さん、懐かしく静かな「櫓木の裏火」という語の選択。

・馬場あき子選

金魚田に網ひく人ら春うらら漁業でもなし農
業でもなし (大和郡山形市) 四方 護
☆朝バスでとなりのクラスの男子からチョコ味
のいちご大福もらう (奈良市) 山添 葵
子どもの頃怪獣になり霜柱踏んだこと足は覚
えておりぬ (岡山市) 小林 和恵
ヒマラヤにアンモナイトの石を割る太古の海
の音が聞こえる (白岡市) 望月 充丈
☆昔から微かだけれど好きな音雪が静かに着地
する音 (富山市) 松田 わこ
ごんぎつねに母語を書き込む青年はミヤンマ
ー逃れ来し夜学生 (寝屋川市) 今西 富幸
寒中の冷え極まりし奥能登の満月の匂いする
ような夜 (石川県) 瀧上 裕幸
早五年任命拒否を契機とし学の自由を巡る闘
い (一関市) 奥山与惣美
ユズの木の葉かげに三つぶら下がる羽化する
春を待ちいるサナギ (松戸市) 猪野 寛子
戦友が死ねば小指を缶で焼き郷里へ送るも父
の任務と (亀岡市) 俣野 右内

【評】第一首は有名な奈良の金魚飼育田。四方から網を入れ金魚を移し替える。いかにも長閑な風物詩だが大事な仕事である。第二首は少年少女の間の明るく楽しい小事件。第三首は怪獣になった日の足の思い出。今も励まされる記憶だ。

うたをよむ おどろおどろ

相子 智恵

加藤敏郎、田川飛旅子に学び、現代俳句の第一線を歩み続ける中村和弘。八十代にして、十二年ぶりの句集『荊棘』(ふらんす堂)が刊行された。人間の影こそ荊棘夜の秋

和らぎ、藪に奇妙な安らぎがもたらされる。『荊棘』の漢字の効果で、単なる人間批判を超え、人間と草木が暗闇の中で交じり合うような不思議な読後感がある。本句集は、生物が生きているがゆえの非情さが淡々と描かれ、生死の匂いが濃い。最新の句集の中では、屈指の骨太さだ。キリンの脚の巨き関節夏に入る

ごみ袋濡らしておけば生きておる瓦礫はや地層成しつて野梅咲く
高級なカニが最後に鉄ひのは、市場のトロ箱に敷かれた水の一片。価値がないと選別された「ごみ袋」は、しぶとく生きる。人間が作り、瓦礫と化した物は地層となり、野の梅はかわらず咲く。こうした句を読み、表題句に立ち返る時、人間の業の深さが藪のように絡みつく。しかもそれは今、人間の影に留まっているのだろうか。「何でもあり」のニュースが多い今、おどろおどろしさは陰に日向に、世界を絡めとっていつているような気もしてくる。(俳人)

記者サロン「馬場あき子さんと振り返る 朝日歌壇の半世紀」 馬場あき子さんの退任を記念したイベントを4月19日午後2時から朝日新聞東京本社で開きます。募集する短歌(自由詠)の締め切りは3月20日(希望者のみ)。定員100人。4月25日からオンラインでも視聴可能。紙面購読者は無料で申し込みます。申し込みはQRコードから。



☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。